

高校生に語る

# 人は何を食べることを「忘れたのか」という問いの重要性

## — 食から考える持続可能な社会 —

武田 淳 (国際文化学科)

小麦をはじめとした食品の価格が高騰し、家計が圧迫されている。生活は苦しいが、日本では「値上げで済んでいる」ともいえるかもしれない。一方ガーナやエチオピアなどの一部の地域では、物価高騰のあおりを受けて飢餓が起きているからである。なお、いずれの国も主産業は農業である。「食糧を作っている人々が飢える」という奇妙な世界を我々は生きている。なぜ、このような事態が起きるのか、問題解決のカギはどこにあるのか、食をめぐるこれからの社会を考えてみたい。

かつて、飢餓の主要因は、干ばつや冷害などの気象条件とされてきたが、現在起きている飢餓は、途上国の急激な経済成長が背景にあるとWFP (国連世界食糧計画) は指摘する。ここではガーナの事例に挙げたい。ガーナと言えばカカオ生産が有名であるが、同時に「農園で働いている人々はとても貧しい」というイメージを抱いている人も少なくないだろう。しかし、近年は、GoogleやX (旧Twitter) がアフリカ初の拠点をガーナに開設し、「西アフリカのシリコンバレー」と評されるほど経済成長が著しい。それに伴って、都市の開発が進み、かつては「一生カカオ農園で働かざるを得ない」と考えられていた人々が、都市に働き先を求めて移住しているのである。しかし、職業訓練を受けていない人々は、低賃金労働に従事せざるを得ない。農村にいるときは食糧自給が可能でも、都市ではそうはいかない。そのため、わずかな収入の大半は食糧購入に充てられることになる。このような状況に小麦などの価格高騰が重なったことで「高いので食糧が買えない」という事態が発生したのである。

では、このような状況をどのように打開したらいいのか。筆者が研究するパプアニューギニアからそのヒントを探ってみよう。調査地は、標高2,000mの山岳地帯で暮らすヤガリア (Yagaria) と呼ばれる民族の村である。いまだに電気・ガス・水道・携帯電話の電波もないこの村の生活は、農耕を基本にしながらも狩猟と採集を組み合わせながら成り立っている。彼らと森を歩くと、目的地へ着くまでに何度も足を止める。キノボリカンガルーの巣を見つけて急に狩りを始めたり、野草を摘んだり、移動の最中にも食糧調達をしている。食糧の「足し」になるものを、少量ずつ自然界から得ることで日々の生活を成り立たせているのである。

こうした「食糧の足し」のひとつに昆虫がある。ヤガリアの人々は幼虫だけでなく、成虫も食べる。そのバリエーションは、カミキリムシ、バッタ、カメムシなど多岐に渡る。彼らから、それまで「ただの草や虫」だと思っていたものが有用なものだと学んだとき、私たちの身の回



りには実に多様な「食べもの」で溢れていることに気付かされる。

もちろん、「食べられるもの」と「食べられないもの」を峻別する力は、私たちの文化の中にも存在してきた。例えば、筆者は昨年、市民を対象にどんぐりを食べるワークショップを開催した。どんぐりは縄文時代から食べられてきた木の実であり、中には軽く煎っただけで簡単に食べる種類も存在する (そもそも栗はどんぐりの一種でもある)。参加者のうち、中高生にとって、どんぐりは「はじめて食べる食材」であったが、年配の方にとっては「幼少期のなつかしい経験」であった。つまり、わずか数十年しか歳の差がないにも関わらず、私たちは「何が食べることができるか」に関する記憶を忘却しているのである。

なお、主食として利用可能な植物は、世界に約30,000種存在すると言われている。一方で、世界で消費されている主食の4分の3は、トウモロコシ、小麦、米で占められている。多様に存在する「食べもの」のうち、私たちはごく限られたものしか口にしていないのである。換言すれば、私たちの世界は、「食べ方を忘れたもの」で溢れているのである。つまり、現在起きている飢餓は、「本来は食べられるもの」に囲まれながら起きている。それゆえに、「忘れられた食べもの」の記憶を記録に残しておく作業は、今後の社会で重要になると筆者は考えている。

2050年には世界人口は97億人に達する。その時、すべての人が現在のアメリカ合衆国の人と同じ食生活をしたと仮定すると、ブラジルの国土面積に相当する森林を伐採して農地に変えなければ人類を養うことはできないと言われている。そこで、畜産肉の消費量の減少や、肉に替わる代替食品 (昆虫食や培養肉など) の開発が進められている。持続可能な食糧調達を考える上では、環境負荷が低い食へのシフトが欠かせない。しかし、培養肉も昆虫食も「売りもの」になってしまった瞬間、「お金がないから買えない」ことに起因する現代の飢餓は回避できない。そう考えると別の解決策があるのかもしれない。そのひとつは、ここまで見てきたような「忘れられた食べもの」を利用することである。帰り道に、食糧の「足し」になるものを少量ずつ取って食べる。そうした先人たちの営みが持続可能な社会のヒントになると考えている。

大学ではフェアトレードなどの国際協力の科目を担当しています。これまで学生たちと行った実践は、こちらからご覧いただけます。



※本研究は、JSPS 科研費20H04438および20K20506の助成を受けて実施した研究成果の一部です。